

汝 姦淫する勿れ
心の内奥にまで迫る神の律法

私たちの主は、マタイ5：17で、「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだと思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」と言われた後、次の21節以下で、六つの具体例を挙げて、ファリサイ派の人々や律法学者の伝統的律法解釈と対称させつつ、旧約の律法の真の意味がどこにあるかを教えられた。

まず21～26節で「殺してはならない」という戒めについて教えられた後、主は27節以下で第2の例を挙げる。「あなたがたも聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである」（27～28節／口語訳“だれでも情欲をもって女を見る者は、心のなかですでに姦淫をしたのである”）。

聖書のいう罪とは、ただ単に外に現れた行為としての罪だけではなく、心の中で私たちが抱く思いにまで及ぶ、という鋭い罪観をここでも主は明白にされた。他人に対する破壊的な心の怒りや憎しみ、隣人の人格に対する嘲笑や軽蔑の思いが、神の前には“殺人”の罪にひとしく罪であるように（5：22～23）女性に対する内的なみだらな思いや情欲もまた神の前には“姦淫”の罪に等しい、と主は言われるのである。私たちがそのように信じそのように生きて来たこの世の常識を根底からひっくり返す何と厳しく深い教えであろうかと思う。そのような神の言葉の前に立たされる時、人はただ驚きおののくのみである。

神は聖にして義なる方である。人はその神の前に聖であるように求められている。性は神聖なもので、結婚もまた神聖なものである。従って、神は、結婚生活においてもそれ以外の場合でも、神の前に純潔で慎み深く生きることを求めておられる。「姦淫するな」というこの第7の戒めは、隣人に対する、単に外的肉体的な姦淫行為を禁じているだけでなく、言葉や思いを含めて、あらゆるみだらな行ないをさげ、素振りや言葉、心の思いや欲望においてさえ、神の前に慎み深くあることを求めているのである。

人の内なる思いと心とは深い、しかし、神は矢をもって彼らを射られる、とダビデは言う（詩編64：7～8）。他の詩編の記者も言う、神は心の秘密を知っておられ、その御目の前に隠れることのできるものはない、と（詩編44：22）。そのような神の前に出て、私は完全な人間です、今だかつて、行ないにおいても思いにおいても、第七戒のオキテを破るような罪を犯したことは一つもありません、と自分の義を主張できる人はだれもない。

神の律法の前に立たされる時、人は徹底的に自分の無力さ、愚かさ、罪深さを示される。自分は罪などないと主張する傲慢な心は打ち砕かれ、神の前に徹底的に心を低くされる。そして、そのとき初めて十字架の福音、すなわち、イエス・キリストにおける罪の贖いと赦しの恵みに目を開かれ、心を低くして、その恩寵を求めるようになるのである。信仰とは自らの罪を悔い改め、十字架の前に伏し、神の赦しの恵みに感謝して生きることなのである。